「今日の説教、聴き手のために」　2012/7/1　明治学院教会（278）
（このプリントは毎週作っているものです）　牧師　岩井健作

「不条理を生きる」

ヨハネの手紙一　３章１節－１２節

「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」（3:2）

1、「子どもの喧嘩に親がでる」という諺は、親のおとなげなさをたしなめたものです。子どもはいろいろ経験して成熟するのです。親はその成熟を見守ること、信じるのが役目です。親は子にとって終末論的存在（現在そうでありながら、やがて最後に真の意味が明らかされつつ出会う存在）です。親の棺の傍らで、親の存在の重さに涙していたある息子の姿を忘れることができません。

2、今日の聖書の箇所は、神はすでにイエスという歴史的存在のうちに十分自らを現されながら、なおやがて「御子のありのままを見る」（3:2）と言っています。この手紙が、グノーシス（認識）化された「救い」の理解を説く「偽り者」（2:22）とその「教え」（2:28）への反駁の書であることは繰り返し述べました。論敵は「神を知っている」（2:4）と言います。神を認識しているのです。その認識には時の経過がないのです。一種の「知的悟り」なのです。「御子に似たものとなるということを知る」という知り方とは違う「知り方」です。この「知り方」の違いが問題なのです。ヨハネは「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい」（3:1）と言います。「考える（エイドン）」は、知的認識ではありません。考察することですが、感じる、経験する、出会う、という幅を持った言葉です。それは知的、理性的営みですが時間の経過の中での営みです。「神の愛」を「人と人との関係（愛）」によって経験し、確かめてゆく知り方です。４節から１０節には「法」（法の対儀語としての「罪」）とか「義」という概念がでて来ます。それは、「自分の兄弟を愛する」ということと同じ事柄だと言われています。つまり、「神の愛」は、「人を愛する」事柄の中で経験されるのだ、ということです。「神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人のうちにいつもあるからです」（3:9）とまで言っています。神関係と倫理は密接に結び付いています。それが結び付かないのがグノーシス<者>でした。ヨハネでは「義を行う＝イエス（御子）と似たものとなる＝互いに愛する（11節以下）」ことの全体が「知ること」でした。

3、１１節以下で（ここはこの手紙唯一の旧約の引用、創世記４章）、カイン（農耕者）がアベル（牧畜者）を殺害する出来事を、「互いに愛し合うこと」の対極の話ととして語ります。歴史の文脈では「強者」と「弱者」の関係を象徴しています。現代的には軍事力（核の力）経済力で勝負する世界を象徴します。気の遠くなるような不条理の世界です。でもそこでの経験を通して神の愛が知られてゆくことは、終末論的出来事です。「これから自分を神にだんだんとゆだねていけると思う」と癌の末期に信仰告白をして受洗したある姉妹の「だんだん」という言葉が、不条理を突き抜ける希望と慰めとして思い起こされます。